

嫌悪対象者に対する嫌悪者自身の感情や行動の評価

金 山 富貴子 (田園調布学園大学)

A Study on the Evaluation of People's Feelings and Behavior towards Disliked Members of Their Social Group

Fukiko KANAYAMA (*Den-en chofu University*)

Abstract

The purpose of this study was to examine how to evaluate one's feelings and behavior when someone dislikes another member of their social group. A questionnaire survey was administered to 103 college students (50men and 53women), which asked them to imagine two people that they dislike (one person they strongly disliked and one person they mildly disliked) who belonged to their same social group. In general, disliking a person and displaying such feelings are considered negative; however, in this study the participants were found to accept their feelings and behavior towards that person. This tendency was stronger for people whom they strongly disliked. The more a person dislikes another person, the more that person is likely to attribute their feelings to that person and rationalize both their feelings of dislike and their behavior. For future research, it is necessary to examine what factors determine people's feelings of dislike for others and how they accept behavior demonstrating such feelings, and their relationship with mental health.

Key words : interpersonal dislike, self-evaluation, feeling and behavior.

キーワード : 対人嫌悪、自己評価、感情と行動

問題・目的

社会生活を送る人の多くは、学校や職場やサークルなど何らかの組織や集団に所属している。自分の所属している組織や集団内の人々との社会的関係において、多くの人は否定的な関係を構築することを望んでいないであろう。しかし実際には、自分の所属する組織や集団内において他者を嫌いになることもあるであろう。

本研究では、ある人がある特定の人物を嫌いになるという対人嫌悪事態について、金山 (2002, 2010) や金山・山本 (2003, 2005) と同様に、嫌う側の人を“嫌悪者”、嫌われる側の人を“嫌悪対象者”と呼び、所属集団内の対人嫌悪について検討を行う。

人は、ある他者を嫌いになった場合、その嫌いな人物 (嫌悪対象者) に対しては、一般的に拒否や回避の欲求や行動を生起させる傾向のあること (齊藤, 1990) が知られている。また、一般的には、人は嫌いな人と会話を行うことにストレスを感じ (橋本, 1997)、嫌いな人に対しては親和や協力の欲求やそれらの行動が低いこと (齊藤, 1990) が知られている。

しかし、自分の所属集団内で日常接する人が嫌悪対象者である場合、嫌悪者はその嫌悪対象者との相互作用を避けられず、拒否や回避といった行動をとることができないことも多いと考えられる (金山, 2005)。拒否や回避ができずに嫌悪対象者と日常接する中で、嫌悪者は嫌悪対象者に親和行動や協力行動を行わないだけでなく、嫌いであることを態度や行動に表出してしまいうこともあるかもしれない。

嫌悪対象者に対して嫌悪者が嫌悪を表出することは、嫌悪者である自分と嫌悪対象者との関係を悪化させたり、所属集団全体の雰囲気悪化させたりすることにつながる可能性がある。そのため、嫌悪対象者に対して嫌悪者が嫌悪を表出することは、一般的には望ましくないことと捉えられている。また、他者を嫌いになることそのものも、一般的には望ましくないことと捉えられる傾向があるようである。

人を嫌いになることや嫌いになった嫌悪対象者に嫌悪感を表出することは、一般的には望ましくないこととして否定的に捉えられているが、嫌悪者自身は自分が嫌悪対象者を嫌いになったことを否定的に捉えたり、

嫌悪対象者に嫌悪感を表出する言動をとった場合にそのことを否定的に捉えているであろうか。もし、否定的にとらえているならば、実際に自分の所属する組織や集団の中で誰か特定の人物を嫌いになった時に、その嫌悪対象者に対して自分が感じる嫌悪感や、嫌悪対象者に対して自分のとる行動を否定的にとらえ、嫌悪対象者との相互作用を憂鬱に感じるなど精神的悪影響が生じる可能性のあることが考えられる。

そこで、本研究では、自分の所属する組織や集団の中に嫌いな人物がいる場合に、その嫌悪対象者を嫌いである嫌悪者が自分自身の嫌悪感や嫌悪を表出するような行動をどのようにとらえているのかについて検討を行うことを目的とする。

嫌悪対象者に対する嫌悪感や嫌悪表出行動を嫌悪者が否定的に捉えるか受容するかには、嫌悪者が嫌悪原因を自他のどちらに帰属するかや自尊感情が関係することが考えられる。自尊感情とは、自己に対する肯定的または否定的態度 (Rosenberg, 1965) であり、自尊感情の低い人は高い人よりも否定的な情動を経験しやすいこと (Cutrona, 1982; Goswick & Jones, 1981; Leary, 1983; Taylor & Brown, 1988; White, 1981) や、自尊感情の高さが不安などの否定的情動を和らげたり、身体的健康を促進すること (Baumeister, 1993; Greenberg, Solomon, Pyszczynski, Rosenblatt, Burling, Lyon, Simon, & Pinel, 1992; Taylor & Brown, 1988) などが示されている。このことから、自尊感情が高い人ほど自己を肯定的に捉えるため、嫌悪の原因を自分ではなく嫌悪対象者に帰属し、自分の感じている嫌悪感や自分の嫌悪を表出するような行動をそれほど否定的に捉えず、嫌悪対象者との相互作用をそれほど憂鬱に感じないのではないかと考えられる。

そこで、本研究では、嫌悪者自身の嫌悪原因の帰属の仕方や自尊感情に着目し、嫌悪対象者に対する嫌悪感や嫌悪を表出するような行動の捉え方に、嫌悪原因の帰属の仕方や自尊感情が直接あるいは間接的に影響することを仮定し、相互の影響を考慮しながら、影響過程を探索的に検討することとする。

なお、嫌悪対象者に対して感じる嫌悪感や、嫌悪対象者に対して行う嫌悪の表出は、嫌悪者が嫌悪対象者に対してもつ嫌悪感の強さによって異なることが予測される。そのため、嫌悪者が嫌悪対象者に対してもつ嫌悪感が強い人物 (以下、高嫌悪対象者) と弱い人物 (以下、低嫌悪対象者) の2種類を設定して、検討を行う。

方 法

1. 調査対象者

大学生113名 (男性57名、女性56名) を対象に質問紙

調査を行った。平均年齢は20.31歳 ($SD = 1.06$) であった。

本調査で回収した113名のデータのうち、本研究で分析に用いる変数の回答の全てに欠損値の無かった103名 (男性50名、女性53名) のデータを分析対象とした。なお、103名の平均年齢は20.33歳 ($SD = 1.08$) であった。

2. 調査方法

2004年2月に、大学の講義時間などを利用して質問紙を配布する集団形式や、調査協力者が同じ大学の知人に個別に配布する形式で質問紙の配布を行った。

質問紙を配布する際に封筒を渡し、その封筒に回答済みの質問紙を入れて封をしてもらったものを後日回収した。

なお、回答にかかった所要時間は、おおよそ10分～15分程度であったと思われる。

3. 質問紙の構成

(1) 嫌悪対象者の想起

現在自分が所属している組織・集団内において嫌いであるけれど関わらなければならない同性の人物に関して、“すごく嫌いな人物” (高嫌悪対象者) と “なんとなく嫌いな人物” (低嫌悪対象者) とを1名ずつ想起するよう求め、各人物の年齢や関係等を尋ねた。

(2) 質問項目

以下の①～⑤については想起したそれぞれの嫌悪対象者のことについて尋ね、⑥については回答者自身のことについて尋ねた。

① 嫌悪対象者への嫌悪感

想起した嫌悪対象者に対する嫌悪感の程度を調べるため、“嫌い” “好き” “迷惑” “苦手” の4項目について、“全くそう思わない (1点)” ～ “非常にそう思う (6点)” の6件法で回答を求めた。

② 嫌悪対象者に対する嫌悪感の受容

想起した嫌悪対象者に対して感じる嫌悪感を回答者自身がどの程度受容しているかを尋ねる4項目を独自に作成し、想起した嫌悪対象者に対して現在自分が持っている嫌いだという気持ちを受容しているかについて、“全くそう思わない (1点)” ～ “非常にそう思う (6点)” の6件法で回答を求めた。

③ 嫌悪対象者に対する嫌悪表出行動とその受容

想起した嫌悪対象者に対して嫌悪を表出する行動をどの程度とっているかを尋ねる8項目と、その行動を回答者自身がどの程度受容しているかを尋ねる8項目を独自に作成し、想起した嫌悪対象者に対して各嫌悪表出行動をどの程度とっている

かについて“全くそう思わない（1点）”～“非常にそう思う（6点）”の6件法で回答を求め、各々の嫌悪表出行動について自分でどの程度受容しているかについて“全くそう思わない（1点）”～“非常にそう思う（6点）”の6件法で回答を求めた。

④ 嫌悪対象者への嫌悪原因の帰属

想起した嫌悪対象者に対してその嫌悪の原因を嫌悪対象者にどの程度帰属しているかを尋ねる4項目を独自に作成し、想起した嫌悪対象者に嫌悪の原因がどの程度あると思うかについて“全くそう思わない（1点）”～“非常にそう思う（6点）”の6件法で回答を求めた。

⑤ 嫌悪対象者との相互作用時の憂鬱感

嫌悪者が嫌悪対象者に憂鬱感を感じるであろう相互作用を3項目独自に作成し、それぞれの相互作用時に嫌悪者が嫌悪対象者にどの程度憂鬱感を感じるかについて“全く憂鬱でない（1点）”～“非常に憂鬱である（6点）”の6件法で回答を求めた。

⑥ 嫌悪者自身の自尊感情

嫌悪者の自尊感情を調べるため、Rosenberg（1965）を邦訳した山本・松井・山成（1982）の自尊感情尺度10項目の中から、回答のしやすさを考慮して7項目を抜粋して用い、自分自身にあてはまる程度について“全くそう思わない（1点）”～“非常にそう思う（6点）”の6件法で回答を求めた。

結果と考察

1. データの基本的検討

(1) 各変数の一次元性の確認

まず、測定した変数について、変数ごとに主成分分析を行い一次元性を検討し、Cronbachの α 係数を算出して信頼性の検討を行った。主成分分析の結果と α 係数をTable 1に示す。

嫌悪感に関する4項目、嫌悪感の受容に関する4

Table 1. 各変数の主成分分析の結果

嫌悪感 ($\alpha = .67$)		負荷量
1	A (B) さんを嫌いである.	.86
2	A (B) さんに対して迷惑な人だと感じる.	.66
3	A (B) さんのことが苦手である.	.55
4	A (B) さんを好きである. (逆転項目)	.79
		寄与率 52.08%
嫌悪感の受容 ($\alpha = .72$)		負荷量
1	自分がA (B) さんのことを嫌いだと感じるのは自然なことだ.	.73
2	自分は、A (B) さんを嫌いであることをいいとは思えない. (逆転項目)	.77
3	A (B) さんを嫌いであることをしょうがないとは思えない. (逆転項目)	.73
4	自分は、自分の中にA (B) さんを嫌いだという気持ちがあることを受け入れている.	.73
		寄与率 54.51%
嫌悪表出行動 ($\alpha = .87$)		負荷量
1	自分は、A (B) さんのことが嫌いであるという態度をとっている.	.87
2	自分は、A (B) さんを避けるような行動をとっている.	.53
3	自分は、A (B) さんのことを嫌いであるという素振りをA (B) さんの前でしている.	.88
4	自分は、A (B) さんの前で、A (B) さんを嫌いであることを表情に出している.	.86
削除	自分は、その場をうまく切り抜けるためにA (B) さんに対して嘘をついていると思う.	—
6	自分は、A (B) さんの前では嫌いな感情が無いかのように振舞っている. (逆転項目)	.74
7	自分は、A (B) さんの言動に適当にうまく合わせている. (逆転項目)	.58
8	自分は、A (B) さんを嫌いであるという気持ちを隠してA (B) さんに接している. (逆転項目)	.77
		寄与率 57.47%

※注：質問紙では、高嫌悪対象者をAさん、低嫌悪対象者をBさんと表記した。

Table 1. 各変数の主成分分析の結果 (続き)

嫌悪表出行動の受容 ($\alpha = .92$)		負荷量
1	〔1 で回答したことにに関して〕 自分はそれでいいと思っている.	.82
2	〔2 で回答したことにに関して〕 自分はそれでいいと思っている.	.71
3	〔3 で回答したことにに関して〕 自分はそれでいいと思っている.	.83
4	〔4 で回答したことにに関して〕 自分はそれでいいと思っている.	.88
削除	〔5 で回答したことにに関して〕 自分はそれでいいと思っている.	—
6	〔6 で回答したことにに関して〕 自分はそれでいいと思っている.	.86
7	〔7 で回答したことにに関して〕 自分はそれでいいと思っている.	.83
8	〔8 で回答したことにに関して〕 自分はそれでいいと思っている.	.85
		寄与率 68.66%
嫌悪原因の帰属 ($\alpha = .80$)		負荷量
1	自分がAさんを嫌いになった原因はA (B) さんにあると思う.	.83
2	自分がAさんを嫌いであるのはA (B) さんのせいだと思う.	.85
3	自分がAさんを嫌いであるのは自分のせいだと思う. (逆転項目)	.71
4	Aさんを嫌いになった原因は元を正せば自分にあると思う. (逆転項目)	.78
		寄与率 62.94%
嫌悪対象者との相互作用の憂鬱感 ($\alpha = .86$)		負荷量
1	A (B) さんと会話する.	.93
2	A (B) さんと一緒にいる.	.90
3	A (B) さんに話しかける.	.88
		寄与率 81.60%
嫌悪者自身の自尊感情 ($\alpha = .88$)		負荷量
1	自分に対して肯定的である.	.83
2	大体において、自分に満足している.	.70
3	自分は全くだめな人間であると思うことがある. (逆転項目)	.73
4	自分は、少なくとも人並みには、価値のある人間である.	.74
5	自分は、色々な良い素質を持っている.	.81
6	自分には、自慢できるところがあまりない. (逆転項目)	.77
7	何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う. (逆転項目)	.79
		寄与率 58.86%

※注：質問紙では、高嫌悪対象者をAさん、低嫌悪対象者をBさんと表記した。

項目についてそれぞれ主成分分析を行った。その結果、それぞれの変数を構成する項目の負荷量が全て第1主成分へ .40以上を示しており、一次元構造であることが確認された (α 係数は順に .67、.72)。そこで、それぞれの変数の平均値を算出し、嫌悪感得点、嫌悪感受容得点とした。嫌悪感得点が高いほど想起した人物に嫌悪感を強く感じていることを示し、嫌悪感受容得点が高いほど嫌悪者自身が嫌悪対象者に対する自分の嫌悪感を受容していることを示す。

嫌悪表出行動に関する8項目について主成分分析を行った。その結果、第1主成分の負荷量が .40以下の項目が1項目あったため、その項目を削除し、7項目について再度主成分分析を行った。その結果、7項目の負荷量が全て第1主成分へ .40以上を示しており、一次元構造であることが確認された (α 係数は .87)。そこで、この7項目の平均値を算出し、嫌悪表出行動得点とした。この嫌悪表出行動得点が高いほど、想起した嫌悪対象者に対して嫌悪者が嫌

Table 2. 各変数の平均値と標準偏差

変数名	全体		高嫌悪対象者		低嫌悪対象者	
	<i>M</i>	(<i>SD</i>)	<i>M</i>	(<i>SD</i>)	<i>M</i>	(<i>SD</i>)
嫌悪感	4.39	(0.82)	4.80	(0.70)	3.99	(0.71)
嫌悪感受容	3.99	(0.86)	4.32	(0.89)	3.66	(0.69)
嫌悪表出行動	2.88	(0.98)	3.11	(1.06)	2.64	(0.82)
嫌悪表出行動受容	4.54	(0.87)	4.43	(0.91)	4.64	(0.82)
相手帰属	4.16	(0.94)	4.31	(0.96)	4.00	(0.91)
憂鬱感	3.88	(1.12)	4.27	(1.08)	3.50	(1.03)
自尊感情	3.78	(0.95)	—	—	—	—

※注：いずれも $N=103$.

悪を表出するような態度や行動をとっていることを示す。

嫌悪表出行動の受容に関する 8 項目について主成分分析を行った。なお、嫌悪表出行動の主成分分析を 8 項目で行った際に第 1 主成分の負荷量が .40 以下であった 1 項目を削除したため、その嫌悪表出行動の受容を尋ねた 1 項目を削除して、嫌悪表出行動の受容についても 7 項目で主成分分析を行った。その結果、7 項目の負荷量が全て第 1 主成分へ .40 以上を示しており、一次元構造であることが確認された (α 係数は .92)。そこで、この 7 項目の平均値を算出し、嫌悪表出行動受容得点とした。この嫌悪表出行動受容得点が高いほど、想起した嫌悪対象者に対して嫌悪者が自分の嫌悪表出行動を受容していることを示す。

嫌悪原因の帰属に関する 4 項目、憂鬱感に関する 3 項目、自尊感情に関する 7 項目について主成分分析を行った。その結果、それぞれの変数を構成する項目の負荷量が全て第 1 主成分へ .40 以上を示しており、一次元構造であることが確認された (α 係数は順に .80、.86、.88)。そこで、それぞれの変数の平均値を算出し、相手帰属得点、憂鬱感得点、自尊感情得点とした。相手帰属得点が高いほど、回答者が想起した嫌悪対象者に嫌悪原因を帰属していることを示し、憂鬱感得点が高いほど嫌悪対象者との相互作用に嫌悪者が憂鬱感を感じていることを示し、自尊感情得点が高いほど嫌悪者の自尊感情が高いことを示す。

以上の各得点の平均値と標準偏差を Table 2 に示す。

(2) 操作チェック

回答者が教示通りに嫌悪度の高い人物と低い人物とを想起していたかを確認するため、高嫌悪対象者

と低嫌悪対象者の嫌悪感得点（順に $M=4.80$ 、 $M=3.99$ ）について理論的中間点（3.5 点）との差の検定を行った。

その結果、高嫌悪対象者と低嫌悪対象者への嫌悪感得点は両方とも理論的中間点（3.5 点）よりも有意に高かった（順に $t(102)=18.87$, $p<.001$; $t(102)=6.89$, $p<.001$ ）。このことから、回答者は、高嫌悪対象者に対しても低嫌悪対象者に対しても嫌悪感を感じていることが示された。

また、この嫌悪感得点が、高嫌悪対象者と低嫌悪対象者で異なるかどうかを調べるため、対応のある t 検定を行った。

その結果、高嫌悪対象者への嫌悪感得点の方が低嫌悪対象者への嫌悪感得点よりも有意に高いことが示された ($t(102)=10.03$, $p<.001$)。

以上のことから、本研究の回答者は教示通りに嫌悪度の高い人物と低い人物をそれぞれ想起していたことが示された。

2. 嫌悪者自身の評価

(1) 嫌悪感の受容

高嫌悪対象者と低嫌悪対象者に対して、回答者自身がどの程度自分の嫌悪感を受容しているのかを調べるため、高嫌悪対象者と低嫌悪対象者への嫌悪感受容得点（順に $M=4.32$ 、 $M=3.66$ ）について理論的中間点（3.5 点）との差の検定を行った。

その結果、高嫌悪対象者と低嫌悪対象者への嫌悪感受容得点は両方とも理論的中間点（3.5 点）よりも有意に高かった（順に $t(102)=9.34$, $p<.001$; $t(102)=2.33$, $p<.05$ ）。このことから、回答者は、高嫌悪対象者に対しても低嫌悪対象者に対しても自分の感じた嫌悪感を受容していることが示された。

また、この嫌悪感受容得点が、高嫌悪対象者と低嫌悪対象者で異なるかどうかを調べるため、対応の

ある t 検定を行った。

その結果、高嫌悪対象者への嫌悪感受容得点の方が低嫌悪対象者への嫌悪感受容得点よりも有意に高いことが示された ($t(102)=6.84, p<.001$)。

以上のことから、全体的に本研究の回答者は嫌悪対象者への嫌悪感を受容しており、その受容の程度は高嫌悪対象者に対する方が低嫌悪対象者に対するよりも高かったことが示された。

(2) 嫌悪表出行動とその受容

高嫌悪対象者と低嫌悪対象者に対して回答者が嫌悪表出行動をどの程度行い、その嫌悪表出行動をどの程度受容しているのかを調べるため、高嫌悪対象者と低嫌悪対象者に対する嫌悪表出行動得点 (順に $M=3.11, M=2.64$) と嫌悪表出行動受容得点 (順に $M=4.43, M=4.64$) について理論的中間点 (3.5点) との差の検定を行った。

その結果、嫌悪表出行動得点は、高嫌悪対象者と低嫌悪対象者の両方において理論的中間点 (3.5点) よりも有意に低く (順に $t(102)=-3.70, p<.001$; $t(102)=-10.52, p<.001$)、嫌悪表出行動受容得点は、高嫌悪対象者と低嫌悪対象者の両方において理論的中間点 (3.5点) よりも有意に高かった (順に $t(102)=10.44, p<.001$; $t(102)=14.21, p<.001$)。

したがって、全体的には、本研究の回答者は高嫌悪対象者に対しても低嫌悪対象者に対してもそれほど嫌悪表出行動を行っておらず、その嫌悪表出行動を自分自身で受容していることが示された。

そこで、嫌悪表出行動の高低によって嫌悪対象者に対してとっている嫌悪表出行動を回答者自身がどの程度受容しているのかが異なるかどうかを調べるため、嫌悪表出行動得点について、理論的中間点 (3.5点) を基準として、嫌悪表出行動を行う程度の高い群 (嫌悪表出行動高群) と低い群 (嫌悪表出行動低群) とに群分けした。そして、高嫌悪対象者と低嫌悪対象者ごとに、対応のない t 検定を行った (Table 3)。

その結果、高嫌悪対象者においては、嫌悪表出行

動高群と嫌悪表出行動低群とで嫌悪表出行動受容得点 (順に $M=4.37, M=4.47$) に有意差が認められなかった ($t(101)=.51, n.s.$)。一方、低嫌悪対象者においては、嫌悪表出行動高群よりも嫌悪表出行動低群の方が嫌悪表出行動受容得点 (順に $M=3.84, M=4.79$) が有意に高かった ($t(101)=4.71, p<.001$)。

このことから、高嫌悪対象者に対しては、嫌悪表出行動の高低に関わらず嫌悪者は自分の嫌悪表出行動を受容しているが、低嫌悪対象者に対しては、嫌悪表出行動を行わない人の方が行う人よりも自分の嫌悪表出行動を受容していることが示された。

以上のことから、全体的には本研究の回答者は嫌悪対象者に嫌悪表出行動を行っておらず、それを受容していたが、嫌悪表出行動の高低で群分けして検討すると、すごく嫌いな人物である高嫌悪対象者に対しては、嫌悪表出行動を行う人も行わない人もその自分の行動を受容しているのに対して、なんとなく嫌いな人物である低嫌悪対象者に対しては、嫌悪表出行動を行わない人の方が自分の行動をより受容していることが示された。

(3) 嫌悪感の受容および嫌悪表出行動の受容と自尊感情、原因帰属、憂鬱感との影響過程

嫌悪者の嫌悪感の受容や嫌悪表出行動の受容に関連すると考えられる変数との影響を検討するため、高嫌悪対象者と低嫌悪対象者ごとに相関分析を行った (Table 4)。

この相関分析の結果をもとに、共分散構造分析によるパス解析を行った。その際、各変数が直接あるいは間接的に相互に影響することを考慮しながら、探索的に解析を行った。母数の推定方法には最尤法を用いた。パラメータ推定値の統計検定量に従い、有意ではなかったパスを削除し、モデルの修正を行った。最終的なモデルの適合度は、高嫌悪対象者では $\chi^2(14)=8.64$ ($n.s.$)、GFI=.98、AGFI=.95、RMSEA=.00、低嫌悪対象者では $\chi^2(13)=6.86$ ($n.s.$)、GFI=.98、AGFI=.96、RMSEA=.00であり、十分な値が得られた。

Table 3. 嫌悪対象者ごとの嫌悪表出行動受容に関する嫌悪表出行動の高群と低群の t 検定結果

嫌悪表出行動受容	嫌悪表出行動高群			嫌悪表出行動低群			t 値	
	N	M	(SD)	N	M	(SD)		
高嫌悪対象者	32	4.37	(1.05)	71	4.47	(0.84)	.51	$n.s.$
低嫌悪対象者	16	3.84	(0.77)	87	4.79	(0.74)	4.71	***

※注：*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

Table 4. 高嫌悪対象者と低嫌悪対象者における各変数間の相関係数

高嫌悪対象者	1	2	3	4	5	6	7
1 嫌悪感	—	.52 ***	.41 ***	.03	.44 ***	.61 ***	.01
2 嫌悪感受容		—	.31 **	.07	.46 ***	.39 ***	.13
3 嫌悪表出行動			—	-.06	.19	.42 ***	.02
4 嫌悪表出行動受容				—	.13	.02	.14
5 相手帰属					—	.26 **	.21 *
6 憂鬱感						—	.05
7 自尊感情							—
低嫌悪対象者	1	2	3	4	5	6	7
1 嫌悪感	—	.56 ***	.22 *	-.11	.29 **	.46 ***	.09
2 嫌悪感受容		—	.09	.03	.33 **	.09	.12
3 嫌悪表出行動			—	-.60 ***	.06	.09	-.05
4 嫌悪表出行動受容				—	-.07	-.15	.08
5 相手帰属					—	-.07	.09
6 憂鬱感						—	.00
7 自尊感情							—

※注：いずれも $N=103$. *** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

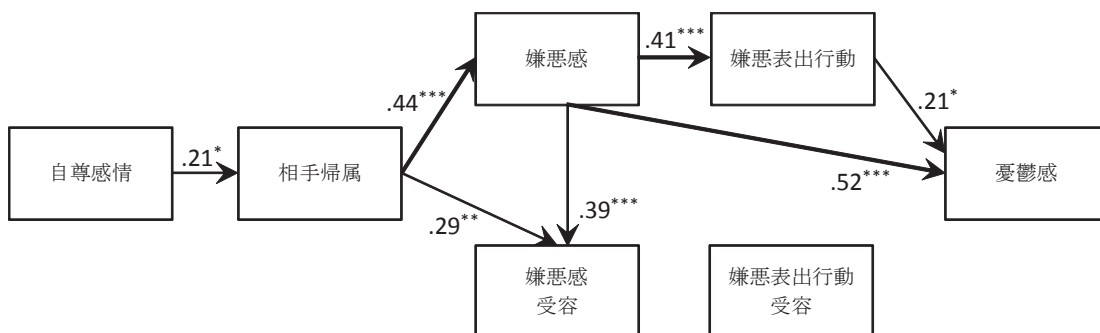


Figure 1. 高嫌悪対象者における嫌悪感の受容や嫌悪表出行動の受容に関するパス解析の結果
(観測変数および誤差変数は、図より省略した。図中の数値は標準化係数を示す。*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$)

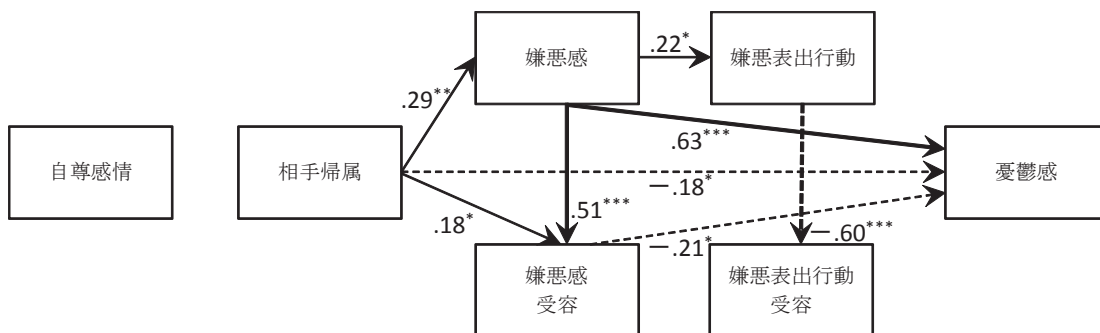


Figure 2. 低嫌悪対象者における嫌悪感の受容や嫌悪表出行動の受容に関するパス解析の結果
(観測変数および誤差変数は、図より省略した。図中の数値は標準化係数を示す。*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$)

高嫌悪対象者に関するパス解析の結果 (Figure 1)、嫌悪感受容には嫌悪感と相手帰属から正のパスが示された。嫌悪感に相手帰属から正のパスが示され、相手帰属には自尊感情から正のパスが示された。嫌悪表出行動受容にはどの変数からもパスが示されず、嫌悪表出行動には嫌悪感から正のパスが示された。そして、憂鬱感には嫌悪表出行動と嫌悪感から正のパスが示された。

このことから、すごく嫌いな人物である高嫌悪対象者に関しては、嫌悪者の自尊感情が高いほど嫌悪原因を嫌悪対象者に帰属し、嫌悪対象者への嫌悪感が高まるが、嫌悪原因を嫌悪対象者に帰属しているため嫌悪者自身は自分の感じた嫌悪感を受容していることが示された。そして、嫌悪対象者への嫌悪感が高いほど嫌悪表出行動を嫌悪対象者へ行い、憂鬱感が高くなることが示された。

低嫌悪対象者に関するパス解析の結果 (Figure 2)、嫌悪感受容には嫌悪感と相手帰属から正のパスが示され、嫌悪感には相手帰属から正のパスが示された。嫌悪表出行動受容には嫌悪表出行動から負のパスが示され、嫌悪表出行動には嫌悪感から正のパスが示された。そして、憂鬱感には嫌悪感から正のパスが、相手帰属と嫌悪感受容から負のパスが示された。

このことから、なんとなく嫌いな人物である低嫌悪対象者に関しては、嫌悪者の自尊感情は関係なく、嫌悪原因を嫌悪対象者に帰属するほど、嫌悪対象者への嫌悪感が高まるが、嫌悪原因を嫌悪対象者に帰属しているため嫌悪者自身は自分の感じた嫌悪感を受容していることが示された。そして、嫌悪感が高いほど嫌悪表出行動を嫌悪対象者へ行い、その嫌悪表出行動を嫌悪者自身は受容していないことが示された。また、嫌悪表出行動の受容は憂鬱感には影響を及ぼさず、嫌悪感が高いほど憂鬱感が高く、嫌悪原因を嫌悪対象者に帰属しているほど、そして嫌悪感を受容しているほど、憂鬱感が低いことが示された。

3. まとめと今後の課題

他者に嫌悪感をもつことや嫌悪を表出するような行動をとることは、一般的には否定的に捉えられる傾向があるが、嫌悪者自身もそれらを否定的に捉えているのかどうかについて本研究で検討した。

嫌悪感については、本研究の回答者は高嫌悪対象者に対しても低嫌悪対象者に対しても、自分の感じた嫌悪感を受容しており、その嫌悪感受容の程度は高嫌悪対象者に対する方が低嫌悪対象者に対してよりも高いことが示された。

これは、パス解析の結果から、嫌悪原因を嫌悪対象

者に帰属していることが影響しているためであることが考えられる。パス解析の結果をみると、高嫌悪対象者においても低嫌悪対象者においても、嫌悪者が嫌悪原因を嫌悪対象者に帰属するほど嫌悪対象者への嫌悪感が強くなるが、その嫌悪感を受容していることが示されている。このことは、嫌悪者が嫌悪対象者を嫌いな原因が嫌悪対象者のせいであるため、嫌悪者は自分が嫌悪感を感じるのには仕方ないことだと捉えて自身の嫌悪感を受容するが、それが高嫌悪対象者においてより顕著になったものと考えられる。

嫌悪表出行動については、本研究の回答者は高嫌悪対象者に対しても低嫌悪対象者に対しても、あまり嫌悪表出行動を行っておらず、そしてそれを受容していた。しかし、嫌悪表出の高低で群分けして検討すると、すごく嫌いな人物である高嫌悪対象者に関しては、嫌悪表出行動を行う人も行わない人もその自分の行動を受容しているのに対して、なんとなく嫌いな人物である低嫌悪対象者に関しては、嫌悪表出行動を行わない人の方が自分の行動をより受容していることが示された。

これは、パス解析の結果から、嫌悪原因を嫌悪対象者に帰属していることが、低嫌悪者においてのみ嫌悪表出行動受容に間接的に影響しているためであることが考えられる。パス解析の結果をみると、高嫌悪対象者においても低嫌悪対象者においても、嫌悪者が嫌悪の原因を嫌悪対象者に帰属するほど嫌悪対象者への嫌悪感が高く、そして嫌悪表出行動をより行うことが示されている。しかし、高嫌悪対象者においては嫌悪表出行動の受容にはいずれの変数も影響せず、低嫌悪対象者においてのみ嫌悪表出行動からその受容へ負のパスが示されている。このことから、高嫌悪対象者においても低嫌悪対象者においても、嫌悪対象者を嫌いな原因が嫌悪対象者のせいであるほど、嫌悪感を感じ、嫌悪表出行動を行うが、低嫌悪対象者に対しては、なんとなく嫌いなくらいで嫌悪表出行動をとることはよくないことだと嫌悪者自身が捉えているのではないかと考えられる。しかし、高嫌悪対象者においては、嫌悪表出行動の高低に関わらず嫌悪表出行動を受容しており、その受容に本研究で用いた変数がいずれもパスを示していなかったため、他の変数も用いて今後検討する必要があるであろう。

以上のことから、本研究で取り上げた嫌悪原因の帰属と自尊感情の変数のうち、嫌悪原因の帰属については嫌悪感の受容や嫌悪表出行動の受容に直接あるいは間接的な影響が示されたが、自尊感情については高嫌悪対象者において嫌悪対象者への嫌悪原因の帰属にパスが示されたのみであった。そのため、嫌悪感の受容や嫌悪表出行動の受容を説明する個人特性の変数とし

て、自尊感情以外の変数も検討する必要があるであろう。

また、嫌悪対象者との相互作用に関する憂鬱感については、パス解析の結果から、高嫌悪対象者に関しては、嫌悪者の自尊感情が高いほど嫌悪原因を嫌悪対象者に帰属し、嫌悪対象者への嫌悪感が強くなり、嫌悪表出行動を行うことによって、憂鬱感が高まることと、嫌悪感が直接憂鬱感を高めることが示された。一方、低嫌悪対象者に関しては、嫌悪原因を嫌悪対象者に帰属するほど、嫌悪対象者への嫌悪感が強くなり、それが憂鬱感を高めるが、その嫌悪感を受容しているほど憂鬱感は低くなることが示された。なお、嫌悪原因を嫌悪対象者に帰属するほど憂鬱感が低くなることも示されたが、これは言い換えると、嫌悪原因を嫌悪対象者に帰属しないほど憂鬱感が高くなることを意味しており、本研究で用いた相手帰属の項目内容から考えると、嫌悪原因を嫌悪者が自分自身のせいだと帰属しているほど憂鬱感が高くなると解釈できる。このことから、なんとなく嫌いな低嫌悪対象者に関しては、嫌悪原因が嫌悪対象者の方であって嫌いであるからその嫌悪対象者との相互作用を憂鬱に感じるものと、嫌悪原因が嫌悪者自身の方であって嫌悪対象者との相互作用を憂鬱に感じるものがあることが考えられる。そこで、どのような嫌悪対象者の場合に嫌悪原因が嫌悪者自身に帰属されるのか、あるいは嫌悪対象者に帰属されるのかなどの詳細についても、今後検討を行う必要があるであろう。

※注：本研究結果の一部は、日本心理学会第68回大会において発表されているが、本稿は、そのデータを再解析し、新たな結果を加えて再構成したものである。なお、本稿の作成にあたって、筆者の立正大学在職時に立正大学心理学研究助成を受けた。

引用文献

- Baumeister, R. F. (1993). Understanding the inner nature of low self-esteem: Uncertain, fragile, protective, and conflicted. In R. F. Baumeister (Ed.), *Self-esteem: The puzzle of low self-regard*, 201-218. New York: Plenum.
- Cutrona, C. E. (1982). Transition to college: Loneliness and the process of social adjustment. In L. A. Peplau & D. Perlman (Eds.) *Loneliness: A sourcebook of current theory, research, and therapy*. New York: Wiley.
- Goswick, R. A. & Jones, W. H. (1981). Loneliness, self-concept, and adjustment. *Journal of Psychology*, 107, 237-240.
- Greenberg, J., Solomon, S., Pyszczynski, T., Rosenblatt, A., Burling, J., Lyon, D., Simon, L. & Pinel, E. (1992). Why do people need self-esteem? Converging evidence that self-esteem serves an anxiety-buffering function. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 913-922.
- 橋本剛 (1997). 対人関係が精神的健康に及ぼす影響—対人ストレス生起過程因果モデルの観点から— 実験社会心理学研究, 37, 50-64.
- 金山富貴子 (2002). 対人嫌悪原因の構造 日本心理学会第66回大会発表論文集, 140.
- 金山富貴子・山本真理子 (2003). 嫌悪対象者に対する感情の構造 筑波大学心理学研究, 26, 121-131.
- 金山富貴子・山本真理子 (2005). 所属集団内の対人嫌悪事態における嫌悪者の行動 筑波大学心理学研究, 30, 13-24.
- 金山富貴子 (2010). 他者への嫌悪傾向と自己の嫌悪的言動傾向との関連 立正大学心理学研究所紀要, 8, 77-87.
- Leary, M. R. (1983). *Understanding social anxiety: Social, personality and clinical perspectives*. Newbury Park, CA: Sage.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.
- 齊藤勇 (1990). 対人感情の心理学 誠信書房.
- Taylor, S. E. & Brown, J. D. (1988). Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, 103, 193-210.
- White, G. L. (1981). Some correlates of romantic jealousy. *Journal of personality*, 49, 129-147.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.